アラリンホルン＆メンヒ・・・我が登山の集大成として

赤澤　東洋

この 6 月で 75 歳となった。世間でいう所の後期高齢者というわけで、この所あっちもこっちもガタがきて無理が利かなくなってきた歯がゆいばかりの我が身なのだが、それでも未練たらたら、も少し頑張れるのではと儚き夢を抱いて、ここ数年ほど「これが最後です」と呟きつつ海外の高峰に挑んできた。そして今年も又性懲りもなくアルプスを目指す事となったのだが、正真正銘「これをもって本当に最後」になったなと思う。

目指したのはアラリンホルン（4027m）とメンヒ（4107m）、あわよくばユングフラウ（4158m）もという欲張ったもので、相棒は同じ 1942 年生まれのオーさん。今回もガイドレス登山と手作りプランに拘った。

私達がガイドレスに拘るのは、先を急がせる彼等のペースに付いていけないからというのが一番の理由なのだが、その他にもう一つ“誰かに連れていってもらう登山ではなく誰かを連れて行ける登山、即ち自立した登山家”を目指しレスキューリーダーや公認山岳指導員への道へ歩んできたこれまでの登山人生、その意地があるからだ。自分達が取り組んできたものが間違ってなかった事を確認する為にも最も相応しいのではと選ばれたのが今回の山というわけで、正に私達二人の登山の集大成、それなりに準備を進め、それなりに自信をもって挑んだのであったのだが・・・。

≪アラリンホルン・7 月 17 日≫

二人の体力を考えアラリンホルンの登山基地サース・フェーへは朝一番の電車で向かう事にし、ツェルマットの宿は駅前のバーン・ホフにした。ここは創業 1902 年という老舗ホテルで日本人クライマーにはお馴染みの宿だ。マッターホルンに何度も登って 90 年代にスーパーおじいちゃんクライマーとして話題になった久留米大医学部の脇坂順一先生は 1961 年からずっと常宿にしていたし、1965 年マッターホルン北壁日本人初登頂の芳野満彦氏も、1967 年冬期マッターホルン第 3 登（日本人初登頂）の小西政継氏もバーン・ホフの女主人パウラ・ビナーさんには大変お世話になったとその著書で感謝の言葉を綴っている。私もこれが三度目で何度も改装を重ね清潔で安価な宿代と共に駅まで 1 分という至近距離が何よりも有難い。

朝一番 5 時 37 分発の MGB 鉄道はガラガラで検札も回って来ない。50 分程のシュタルデン・サースで下車しブリーク方面から来るポストバスに乗換えたが、バス停は駅前広場には無く、駅舎掃除のオバさんに聞き 5 分程歩いた街道沿いにあった。この時もそうだが、バスがサース・フェー到着後もロープウエーへの道が分からずウロウロしてしまったが、手作りの旅は勝手が分からずこういう事が多くなり、それも又旅の思い出というもの。

サース・フェーは鉄道が通ってないだけでなくツェルマット同様に車の乗り入れも禁止され静かなたたずまいの山村は「真珠の村」と称されているという。ヴァリス地方独特のネズミ返しの小屋の前を通り 10 分程歩くとミッテルアラリンへのロープウエー駅に出た。ロープウエーをフェルスキンにて地下ケーブルに乗り換えると労せずして 3457mのミッテルアラリンに到着。バスターミナルからほぼ 1 時間位だった。駅舎を出ると目の前にスキー場が広がり、その先に真っ白なアラリンホルンの大きなドームが青空の下に聳え立っていて「ああ、アルプスに来たのだなあ」を実感する。数あるアルプス 4000㍍峰中、ツェルマットのブライトホルン（4164m）と並んで最も登り易い山と言われているが、氷河の崩壊した爪痕は不気味でそう簡単そうでもない。

昭和の初めに登った松方三郎氏は「山の格では大型巡洋艦というところだが、氷の上はステップ切っていかねばならず、下りではザイルファーレンで苦労した」と書いている（平凡社ライブラリー「アルプス記」）。

ケーブルで一緒だった 20 数名の登山者達は駅舎にてアイゼンを装着し三々五々出発、中にはここか

らもうアンザイレンしているパーテイもいる。私達もハーネスやアイゼンを付けて８時 55 分出発。準備に手間取り少し出遅れてしまった。

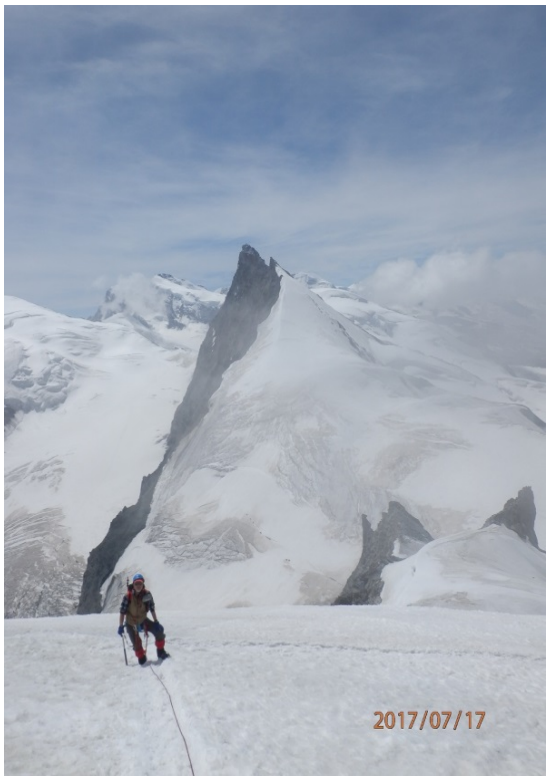
雪上車で圧雪されたスキー場の端を歩き、最上部のスキーヤーの邪魔にならないところでロープを結びあい先行者の跡を追った。何組もの先行パーテイの歩みは早く、すぐに見えなくなってしまったが、トレースは明瞭で頂上へのルートは大きくトラバース気味にジグザグとアラリンホルンとフェー･ホフプ山（3888m）の鞍部フェーヨッホ（3826m）へと向かっている。

（アラリンホルンの大きなドーム。ルートは写真右上奥から廻り込んで大きなクレバスを越え、正面奥のドーム山頂へ）

時々聞こえるゴーという音は雪崩か氷河のセラックが崩れる音だろう。登山ルートの左右には大小のクレバスが口を開けていて不気味だ。これは予想をはるかに上回りブライトホルンには無い迫力があり緊張を強いられ、慎重に迂回する。南西に向かっていたルートを東南に折れてしばらく行くと、大きく寸断されたクレバスを乗っ越す為の大きな木製ハシかっていた。これはつい最近取り付けられたものらしく、まだ木の香を残す立派なハシゴでほぼ垂直、自然に顔が引き締まる。温暖化の影響か、クレパスは日々変化し、深淵さを増しているようだ。

この辺からもうどんどん先行者が下山してくる。聞くと頂上までに要した時間は２時間だったというから、ガイド付き登山はとにかく早い。１人で３～４人確保しているガイドもあり、すれ違う者は皆さんしっかりロープを結び合っている。私達が最後になったようだが、天気も良いし、時間的にも余裕があるしと、こちらはノンビリしたもので、相変わらず７～８歩登っては一呼吸というペースの相棒に合わせてゆっくり、ゆっくりと歩む。鞍部のフェーヨッホに出ると雲海の中にそれまで見えなかったモンテローザやブライトホルンが顔を出し歓声をあげたが、盟主マッターホルンは黒雲の中でどこにあるやも分からない。

目を瞠ったのは背後のリンプフィッシュホルン（4199m）で、反対側から見るとゴジラの背のような鋸歯状の岩稜がこっち側からだと尖っていてなかなか恰好いい。この山に登るにはフェルスキンから行くブリタニア小屋が登山基地になっているらしいが厳しそうだ。



（尖った山稜のリンプフィッシュホルン）

振り返ると後発のケーブルで着いたのだろうか、数パーテイ登って来るのも見え、私達が最後ではない事が分かり、

少しホッとする。相変わらずのノロノロペースで先へ進み雪解けで土も出てきてグチャグチャになった急登を詰めると頂稜のプラトーに達した。1 時 25 分、出発から 4 時間半、これはなんぼなんでもかかり過ぎというものでガイド付きだったら決して許されないに違いないのだが、私達には余裕があって決して焦っていなかった。

（頂上直下のプラトー、正面奥の黒い山頂に十字架）

プラトーには 7 ～8 名の先客が休んでおり、昼食としてキットカットを囓り水を飲み、十字架の立つ山頂の岩山でノンビリ写真を撮り合っていると後発組が登ってきたので 1 時 50 分入れ代わって下山にかかった。

いつもなら足どり軽やかになる下りなのだが、4 時間半もアイゼン登行を続けてきた足は疲労しトロトロとしか歩けず、後発組にどんどん抜かれてここでも最後になってしまう。大ハシゴを過ぎた時に、オーさんが突然「確か地下ケーブルの最終は 3 時半のハズ」と思いも寄らぬ問題発言。時計を見ればすでに 3 時 20 分、何の根拠もなく 4 時半位を想定していたこちらは大慌て。見下ろすスキー場に人影はなくリフトは止まり、地下ケーブルの駅舎のライトも消えている。「こりゃヤバイ！ともかく急ごう」と疲れた足に鞭打って駆け下る。いやはや焦ったのなんの。こんなのは久しぶりだ。3 時 45 分地下駅に着くと下って来る私達を見ていたのだろう、従業員の男性が一般客用の最終は 3 時半に出てしまったが、従業員用のケーブルが 4 時に出るのでそれに乗ってもよいという有難いお言葉。この駅舎には宿泊設備はなく夜間は無人になるとの事でいやあ助かりました。

地下ケーブルの最終時間を確かめておかなかったことは反省しなければならないが、山はガイドレスだからこそ登れたのに違いなく、私達がやろうとしてきた事はあれで良かったのだと先ずは満足。
それにしてもオーさん、よくぞあそこで最終電車の時間を思いだしてくれたもの。そうでなかったら暢気なツラして下ったはいいが駅舎に入れず、標高 3500m近い駅舎の軒先で寒さに震えながらのビバークを考えるとゾッとするばかり、それだけにツェルマットに無事戻りシャワーを浴びたあとで飲んだビールは殊の外格別だった。

≪メンヒ・7 月 21 日≫

3 年前、我々にケィさん、サカさん加えた 4 名で挑戦した時は、嵐吹き荒れた翌日の事とてラッセルとガチガチに凍りついた取付きの下部岩壁で手も足も出ずに退却してきたメンヒだったが、天気さえ良ければ絶対に登れる、いや登ってみせると思いながら、もうそんな機会は訪れないだろうと諦めていたのだが、今回オーさんのお誘いを受け又火がついてしまった。かっては狭い仲間内の事とはいえ岩登りを誰よりも得意としてきた私なのだ。

グリンデルワルトの一つ先、グルント駅 7 時 25 分発の一番電車はほぼ満員状態、クライネ・シャイデックにて登山電車に乗換え、8 時 40 分ユングフラウヨッホ到着。トイレを済ませ駅舎構内のトンネルを抜けてユングフラウ・フィルンの雪原に出て、9 時丁度メンヒヨッホ小屋方面へと向かう。

メンヒの上空は視界は開けて青空も見えるが、なぜかユングフラウは雪雲の中でヨッホのスフィンクスもかすかに見えるだけという天気はどうみたらよいのだろう。風はユングフラウの方から吹いてきており、メンヒもこれから悪くなるのかもと覚悟する。

（ユングフラウ・フィルンをメンヒに向かう）

（メンヒ南壁が見えてきた）

よく整備された広いコースを 40 分程で、メンヒ南東稜取付きへの分岐点となり、左折する。取付きの下部岩壁には先行者のデポした荷物が幾つか置いてあり、我々も使わないストック等をまとめてデポし、ロープ結んで 10 時丁度、岩に取り付いた。

（メンヒ南東稜。トレースの先が取付点。正面奥の白いピラミッドが山頂）

3 年前と異なり、雪は全然ついてないのでここはアイゼン無し、登山靴のままだったが、これが意外にも手強くて難儀する。クライミングシューズなら何と言うこともない岩場なのだが、足元は登山靴の先がわずかにひっかかっているだけ、手掛かりも逆層でしっかりしたホールドが得られず勝手が違う。Ⅱ級程度の岩場だというのに右へ行ったものか、左へいったものか暫し立ち往生、落ちそうで怖い。まさか出だしのこんな所で手こずるなんて・・・。落ちるかもという恐怖と闘い、意を決し息をつめて「エイヤッ！」と一歩を踏み出し、何とか最初の手掛かりを得て少しずつ身体をずりあげる。足元も何とか決めて核心部を登り切り、少し行くと支点用のボルトが打ってあるのを発見。息をつめたせいか、高度のせいか息切れ激しく「ハーハー、ゼーゼー」しばらく動けず息を整えねばならない有様で、それからようやく相棒のビレイにとりかかった。

ここまでで優に 30 分程費やしてしまい、その後も似たり寄ったり、全くの役立たず、相棒の足を引っ張る恰好になってしまい情けないことこの上ない。10 年前は率先してリードし、それなりに登って見せたものだったのに、どーしちゃたのだ。あの頃の我が勇姿ぞ何処？　相棒もあの頃の私を知っているからこそ安心して任せられると思っていたはずなので、期待に添えず本当に申し訳ない。

2 年前に冠動脈硬化狭心症と診断されたものの、その後大きな発作もなく、今回の山行を控えて 6 月に受けた CT 検査では何も指摘されず気をよくして挑んだ今回なのに、やはりどこかがイカレてるに違いない。「えーい！クソッ！！」「なんてザマだ！！」。

（メンヒ・南東稜の取付点。翌朝撮影、登山者は他パーティー）

（下山時には懸垂下降で降った）

そこから先は這って歩くような箇所こそなかったが、ガラガラした岩屑まじりの歩き難い岩稜は踏み跡を見失いやすくルートファインデイングに神経を使い、チョッとした岩場でも、乗つ越す度に呼吸は乱れ激しく咳き込み､バテバテで 10 歩歩いては一休みと遅々として進まない。下部岩稜帯でモタモタしていたら前夜ヨッホ小屋に宿泊し朝 7 時に小屋を出たという 3 人パーテイが下山してきた。典型的なガイド山行のようだが、話す男性は登れた悦びで誇らしげだ。羨ましいが当方もういっぱい、いっぱい余力は残ってない。とうとう雨量計の前まで来て折からガスってきた事もありここで退却を決断したのだった。

あわよくばと翌日狙っていたユングフラウはハナから戦意喪失、ただ眺めるのみとなり、かくて又しても残念な結果となってしまったが､、現実は素直に受け入れねばならないだろう。50 代の元気な頃だったら絶対に登れたに違いないが、あの頃毎年 2 週間近く休暇を取るなんて不可能だった。吹けば飛ぶような零細企業に勤務の身、何年かに 1 度上手く誤魔化し 1 年がかりで根回しし、漸く取れた休暇で登ったのがマッターホルン、キリマンジャロ、モンブランであり、あれが精一杯の成果、メンヒやユングフラウは二の次だったのだから仕方ない。この体調ではもう海外の高峰は無理なのが良く分かり、完全に吹っ切れた。

何はともあれ仰々しく我が登山の集大成と銘打って挑んだ結果はこんなものでありました。山やとしては「ホント、たいしたことねえなあ」というところで、まあしゃんめい。

が、良き友に恵まれいろいろと楽しませてもらったので、それをもって我が登山に悔い無しとしてこの項を締める事にします。

（我が登山、来し方を偲びつつ・・・。メンヒ南東稜雨量計下にて。後方はユングフラウ・ヨッホのスフィンクス展望台。ユングフラウはガスの中）

（完）